



住在北海道的 E・K 先生寄来古体诗两首。

ほっかいどうざいじゅう イー ケー ところ かんし しゅとど
北海道在 住 の E・K さん から 心 に しみる 漢詩 が 2 首 届 きました。



花 見

櫻花爛漫無同期
清酒徊芳難就席
春風得意郷土気
歡情陶醉大和習

放歌益感阔別苦
起舞更著隔世疑
前線満開三千里
不解残孤一身凄



はな み 花 見

さくら さ みだ
桜 が 咲き 乱れ ている、 だが 今 の 私 に 花見 を 共に
たの とうき とも
楽 し む 同 期 の 友 は い ない
はなみ せき せいしゅ かあ
花 見 の 席 に た だ よう 清 酒 の 香 り、 だが こ の よう な
えん
宴 に つく こ と は も う ない だ ろ う
とは い え 春 風 は 心 地 よ く、 故 郷 に い る こ と を 感 じ
さ せ

の も あ にほん なら ところ はず
飲 ん で 盛 り 上 が る 日 本 の 習 わ し に、 心 が 弾 む

うた くち ながねん わか つら
ふ と 歌 を 口 ず さ め ば、 長 年 の 別 れ の 辛 さ が つ の り、
まい ま かくせい かん
舞 を 舞 え ば、 さ ら に 隔 世 の 感 に う た れ る

さくらぜんせん にほんじゅう み
桜 前 線 は か け め ぐ っ て 日 本 中 を 満 た す が、
ざんりゅうこじ つら けいけん ことく おも き
残 留 孤 児 と し て の 辛 い 経 験、 孤 独 の 思 い が 消 え
る こ と は ない

(M.O 訳)

遊洞爺湖有感

秋高神爽楽遠足
 北海遼濶聚残孤
 昔日千重異幫怨
 今時一碧洞爺湖

亭台傲立身自主
 樓閣放目老氣舒
 有幸同乾陳年酒
 無限夕陽照余途



作者介绍

K 先生，于上世纪 70 年代被判明身份回到日本。积累了各种各样工作经验后，切身体会到难以融入日本社会，绝望渺茫，只是活着而已。之后通过参加归国者中心的学习活动，随着交流圈子扩大，感受到了人生的意义。在那时，他写了「游洞爺湖有感」。

两年前，他患了脑梗，肢体活动受限，又作了「花见」这首诗。

とうやこ たび おも 洞爺湖に旅し思う

すがすがしい秋の日は、旅に出たいと心が動く。
 広い北海道の各地から残留孤児仲間が集まった。

昔、満州異国の地で数えきれないほどの苦し
 しみを重ねてきた。

今、紺碧の海のような洞爺湖を眺めて、未だ一人
 前の日本人とはいえないが、日本の文化や習慣に慣
 れてきたとしみじみと思う。

これまで心重く頭を下げて生きてきたが、自分の
 人生や運命は自分で決めることができるのだと、いま
 湖畔の東屋に、体に力を感じて誇り高く立つ。

宿から湖に目を放ち、自分の人生を振り返ると、
 今は何も心配はなく、気持ち伸びやかに解き放たれ
 ていく。

日々を積み重ね熟成した古酒のような、老成した
 同じ仲間が、喜びをともにし美酒を飲み干す。

赤く空に映る夕陽のように輝く老後、安心して
 価値ある人生へ、一歩を踏み出す。その道は限りない。

(Y.K 訳)

さくしゃしょうかい <作者紹介>

K さんは身元が判明して 1970 年代後半に帰国されま
 した。その後様々な仕事を経験しましたが、帰国者は真
 には受け入れてもらえないと感じ、「希望はない、ただ生
 きているだけ」と絶望的な思いを抱くこともあったそう
 です。その後、帰国者センターに通所して交流が広が
 り、生きがいを感じた時期もありました。その頃の詩が
 「洞爺湖に旅し思う」です。

しかし 2 年前に脑梗塞を患い、体が思うように動か
 なくなりました。そして書かれたのが「花見」です。